

太平洋イカ類漁場開発調査

(開運丸によるアカイカ漁場調査、東奥丸によるイカ類漁場調査)

大川 光則・十三 邦昭・中田 凱久

仲村 俊毅・菊谷 尚久

発表誌名

イカ漁場開発調査資料Ⅻ(昭和63年4月)及び昭和62年度外洋性イカ(スルメイカ・アカイカ)に関する生物測定・標識放流・海洋観測基礎資料集

抄 録

昭和62年6～11月の期間において、試験船開運丸(調査海域、 $38^{\circ} - 49' N \sim 43^{\circ} - 00' N$ 、 $142^{\circ} - 12' E \sim 159^{\circ} - 26' E$)及び、東奥丸($39^{\circ} - 01' N \sim 41^{\circ} - 26' N$ 、 $140^{\circ} - 05' E \sim 148^{\circ} - 51' E$)によって、スルメイカ、アカイカ等の漁場環境、イカ類分布の状況等についての調査を行った。

1. 漁場環境

北上暖水の勢力が強く、6月中旬に発生した三陸沖暖水塊は10月中旬には津軽暖流と接続するなど、大きな勢力を維持した。反面、親潮第2分枝も7月頃まで強勢を保ち、8月には、暖水と交錯して複雑な海況となり、顕著な潮境を形成していた。

2. イカ類の分布

(1) スルメイカ

両試験船の総漁獲尾数は948尾で前年を上回ったが、高密度での分布はみられなかった。

(2) アカイカ

延94回の操業で、92,881尾を釣獲した。これは、近年では高い水準である。漁場は、 $146^{\circ} E \sim 152^{\circ} E$ の沖合が主で、沿岸域では密度の高い分布はみられなかった。

3. 水揚量(釣による)

(1) スルメイカ

氷蔵船の水揚量では八戸港では622トン、大畑港では1,385トンであった。

(2) アカイカ

氷蔵船の八戸港への水揚量は284トン、凍結船では173トンで、ともに昭和50年以降、最低の水揚量であった(日本海スルメイカが好漁であったためアカイカを対象に操業した船数が少なかった)。